

葉隠研究会刊

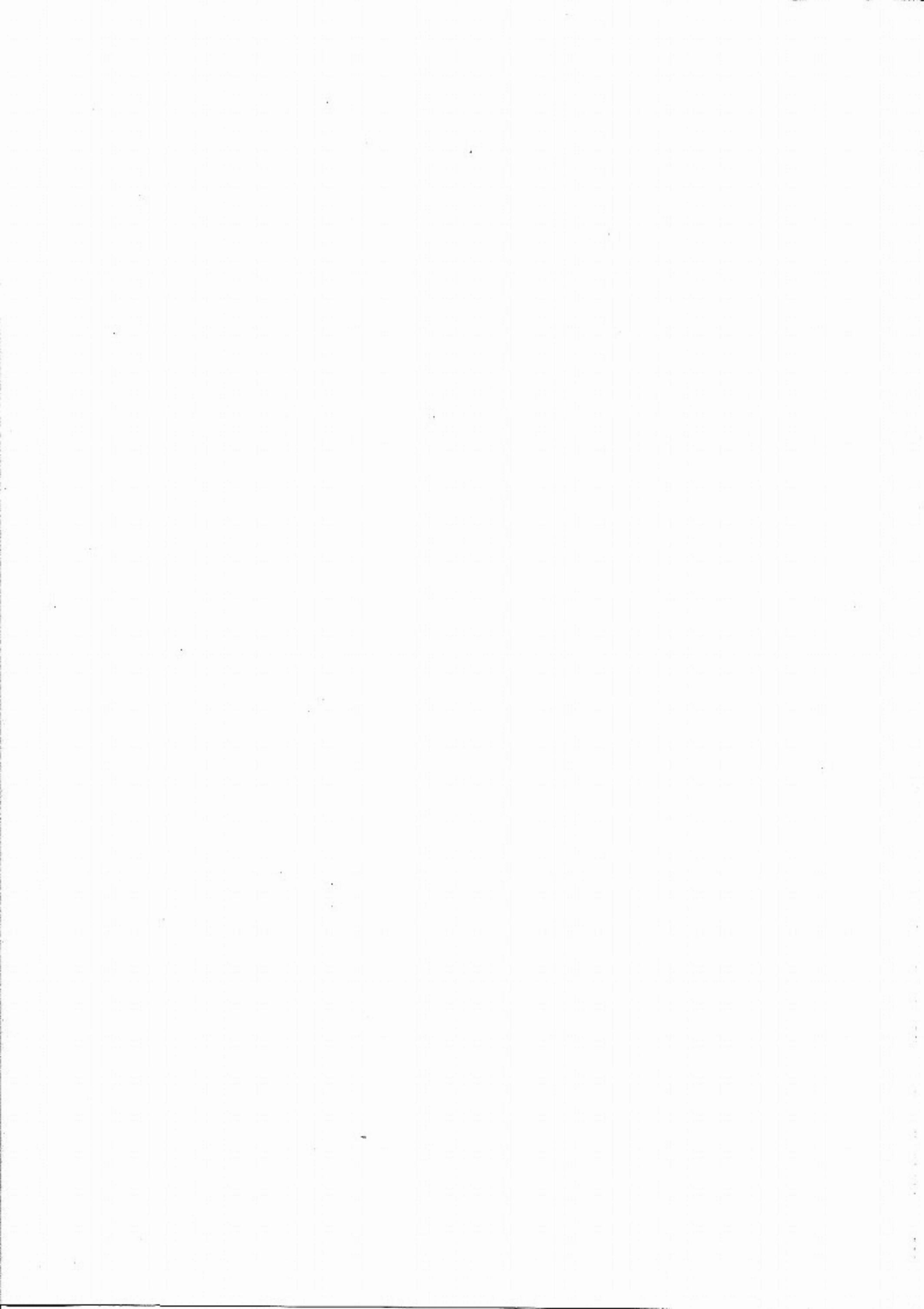
葉隠研究 第十八号抜刷

平成四年三月

葉隠と天文現象

——正徳二年六月朔日の怪事——

園田正樹



葉隠と天文現象

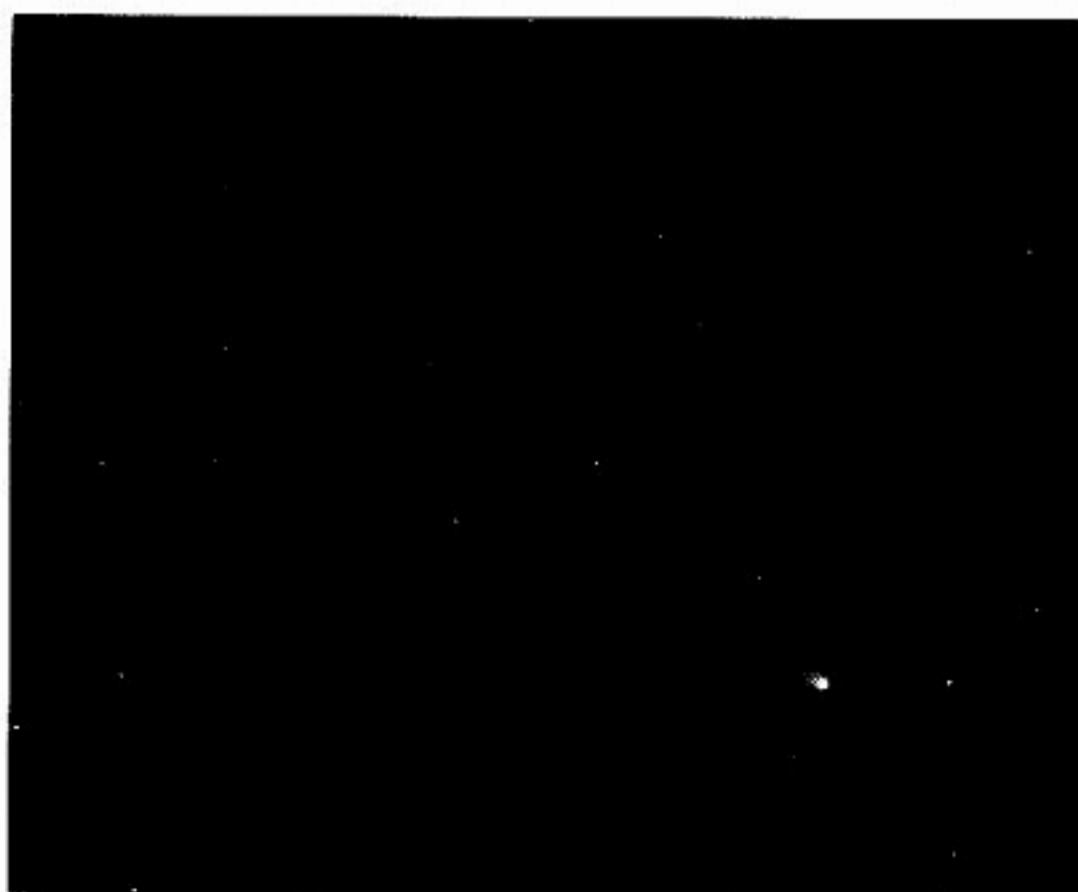
—正徳二年六月朔日の怪事—

園田正樹

一、はじめに

「葉隠と天文現象」という、おそらく「葉隠」関係の解説では初めての内容で、読者の方も面食らうことと思います。筆者は子供の頃から星が好きで、天文との付き合いもかれこれ三十年近くになります。が、「葉隠」に関しては全く素人で、恥ずかしながら「葉隠」の内容の百分の一も読んでおりません。葉隠研究会にも属していない筆者が「葉隠研究」誌に拙文を掲載するのは汗顔の至りですが、私の守備範囲は後述の段だけということでお許し願いたいと思います。

そもそも、「葉隠」に天文現象の記述があることに気付いたのは五年程前に睡眠薬代りに「葉隠」の現代訳文を拾い読みしていたところ、偶然にも「帚星」の二文字が目にとまったのがきっかけでした。よく読んでみると天文に関してなかなか面白い内容でしたので、当時天文同好会誌原稿の材料に窮していた筆者が渡りに舟とばかりに「葉隠と天文現象」と題して同好会誌に載せ



① ハレー彗星

1986年3月8日、小城郡牛津町空山にて200mm望遠レンズで筆者撮影

ました。普段、文章を書かない小人が文章を書くことやたら人に見せなくなるもので、かれこれ十年程前から色々と公私に亙つて御指導いただいている古賀秀男先生に御意見を伺おうと原稿をお見せしたのが運の尽き。このように「葉隠研究」掲載のために原稿を全面的に書き直し、不明な点を調査するために資料代としてウン万円が飛んでいく羽目になりましたが、調査は推理小説を解く様で楽しませてもらいましたし、改めて山本常朝の偉さを再認識した次第であります。

二、葉隠聞書一一〇四 原文

常になき事あれば、怪事といひて何事の前表などいひ伝ふは愚かなる事也。日月重出・箒星・旗雲・光物・六月雪・師走の雷などは、五十年、百年間に有事也。陰陽の運行にて出現する也。日の東より出、西に入も、常になき事ならば怪事といふべし。是に替る事なし。又天変有レ之時、世上に必悪事出来る事は、旗雲を見ては何事ぞ有べしと人々我と心に怪事を生じ、悪事を待ゆへに、其心より悪事出来する也。怪事も用やうに口伝有レ之也。

・何事の前表—何かよくない事が起る前兆。

・日月重出—日と月とが同時に見られる事。

・箒星・旗雲・光物—彗星、旗のようになびいている雲、流星。

※岩波書店刊 日本思想大系26 『三河物語・葉隠』相良亨氏

校注よりそのまま転載。以下便宜上、「岩波版」とします。

※栗原荒野氏編著 『校註葉隠』ではこの段を一〇五番としており現代文訳でも一〇五番としている方が多いようです。

三、現代文訳

異常な現象が起きると、それを怪事として、何事の前兆であるうかとあれこれ言うのは愚かな事だ。太陽と月が同時に見られる事・彗星・旗雲・光り物・六月の雪・十二月の雷などというのは、五十年や百年の間にはたまには見うけられるものである。天地の運行の次第によっては現れるものだ。太陽が東から出て西に沈むことも、いつものことではなかったら怪事という事になる。それと同じことだ。また天変があるとき、世の中にならず悪いことが起きるのは、旗のようになびく雲を見て、何事が起きるに違いないと、人々が自分で心の中に怪事をつくり出し、悪い事が起きるのを期待するので、その心の持ちようから悪いことが起きてくるのである。

怪事を利用した昔話もあることだ。

中央公論社刊『日本の名著17葉隠』責任編集 奈良本辰也氏よりそのまま転載しました。以下便宜上、「中公版」とします。

ただし、最後の一行の現代文訳が掲載されていなかったため、

その分だけは、教育社刊『原本現代訳「葉隠」(上)』松永義弘氏訳より転載しました。これも便宜上、「教育社版」とします。

なお、「中公版」、「教育社版」とも現代文訳の内容についてはほとんど同じでした。

四、「葉隠聞書一—一〇四」の中に出てくる天文現象

前掲の原文と現代語訳を読んで頂ければ、この段の大意は理解できると思います。この段を読んで驚くことは、山本常朝は物事の諸現象に対する確な判断を下していることです。つまり、三百年も前の江戸時代に今風で言えば、「科学的考察力」を持っていたことです。それに比べたら、今日これだけ科学技術が進み、またほとんどの人が高等教育を受けているはずの日本でも、科学もどき屁理屈を利用した流言飛語を本気になって信じている人が多数いること自体「怪事」と言えるかもしれません。最近では「惑星直列」・「ノストラダムスの大予言」・「富士山大爆発」・「ハレ—彗星大接近」等々、解説するのもアホらしい騒ぎがありました。

さて、肝心の「葉隠」の中の天文現象ですが、原文を見て分かつるとおり、「日月重出」・「彗星」・「光物」の三つです。以上、三つの天文現象については後段で各項ずつ解説を加えたいと思います。なお、原文中にある「旗雲」は気象現象で原文注釈の通り、「旗のようになびいている雲」の解釈で結構だと思いますが、実際には彗星の事を旗雲と記録してある古文書もあるそうです。

「葉隠」の原文を読む限り、これら三つの天文現象を山本常朝自身が実際に目撃し、かつ、不吉に感じた一般民衆が動揺して騒ぎになったと考えるのが自然だと思います。この「山本常朝自身

が実際に目撃した。」という事が、この段を解釈する上での重要なポイントとなります。

五、「日月重出」について

まず、「日月重出」の解釈ですが、岩波版の注釈では前述のとおり、「日と月とが同時に見られる事。」となっています。現代語訳の方はどうかというと、中公版も教育社版も「日と月とが同時に見られる事。」となっています。他の数点の訳文も同様でした。ここで、少しでも天文に興味を持っている者なら、これらの解釈にすぐ疑問を持つところではあります。

第一に、「日と月とが同時に見られる事。」という現象は私達がよく目撃する事で、西に太陽が傾いた時は半月以上、つまり上弦の月であれば楽に見ることができず、明け方の中空に下弦の白い月が見えたりする事はよくある事です。特に、明け方の月は「有明の月」として古代から好んで和歌に詠み込まれています。要するに、この現象は日常茶飯事に目撃される事で、珍しくも何ともないという事です。

第二に、いくら江戸時代とはいえ、日と月が同時に見えたくらいで、誰も畏敬の念や、恐怖感を感じなかったはずで、以上の理由から、「日と月とが同時に見られる事。」という解釈では「葉隠」で云うところの「怪事」には役不足であると思います。

それではどういう解釈が正解でしょうか。実は、佐賀天文協会の星仲間がこの原文を見せたところ、皆、異口同音に「ああ、こ

れ日食のことね。」と答えました。多分、少しでも天文をかじったことのある人なら、「日月重出」の文字を見れば、ほとんどの人が日食のことと気付くと思います。なお、正確には「日蝕」と書くべきですが、慣用的に「日食」と表記します。

【葉隠】で云うところの「怪事」は日食と断定しましたが、同じ日食でも浅い部分日食では役不足です。一九八七年九月二十三日の沖縄金環食を佐賀で観測した経験によれば、この時の佐賀での食分が〇・七九とかなり深い部分日食であったにも拘らず、空が若干薄暗くなったかなというぐらいで、日食の予報を知らない人は全く気付かない程度の変化でした。

一方、昨年ハワイでの皆既日食や、沖縄金環食を実際に観測してきた佐賀天文協会のメンバーによれば、皆既日食はもちろんですが、食分〇・九七の沖縄金環食でもかなり空が暗くなり、気温の急激な低下も体験して神秘的雰囲気も充分あったそうです。よって、「怪事」と呼べる様な日食は、皆既ないし金環日食、もしくは食分〇・九〇以上の深い部分日食に限ると思います。

【皆既日食】

月によって太陽が完全に隠される事。太陽光が遮られるために地上は暗闇になり、星も見える事もある。太陽の回りには真珠色のコロナやプロミネンスと呼ばれる赤く吹き上げる炎を見ることが出来る。二、三年に一度は地球上の極く限られた地域で見ることが出来る。日本では二〇〇九年、奄美大島付近で見える。

【金環日食】

見掛けの月の大きさが太陽より小さい場合、太陽面が環状に残り、その様子が金の環の環に見える事から金環日食という。写真④を参照のこと。日本では二〇一二年太平洋沿岸で見える。

【部分日食と食分】

太陽面が月によって一部分だけ隠されることを部分日食と言う。浅い部分日食なら日本でも二〜三年に一度は見る事ができ、見える地域も広範囲になる。皆既・金環食帯から少しでも外れた地域では部分日食となる。太陽面の欠ける割合を食分といい皆既食は一・〇〇以上、金環食は〇・九九から〇・九〇前後となる。

六、山本常朝の見た日食

前段では、文章上からだけの解釈で山本常朝の見た「怪事」は日食と断定しましたが、その推論が正しければ山本常朝が生存していた間に食分〇・九〇以上の大きな日食が佐賀で見えていたはず。そこで史料を探して見たところ、山本常朝の生存期間中（一六五九〜一七一九年）には少なくとも二回、大きな日食が佐賀で見えた可能性があります。もちろん、ベタ曇りの曇天では「日食」という「怪奇現象」を見ることはできなかつたでしょうが、当日の佐賀での天候や日食の見え具合などは当時の記録を調べていけませんので何とも言えません。ひよつとしたら、県内の古文書にこの日食の記録があるかもしれませんので、心当たりのある方はお知らせいただければ幸いです。ところで、山本常朝の見

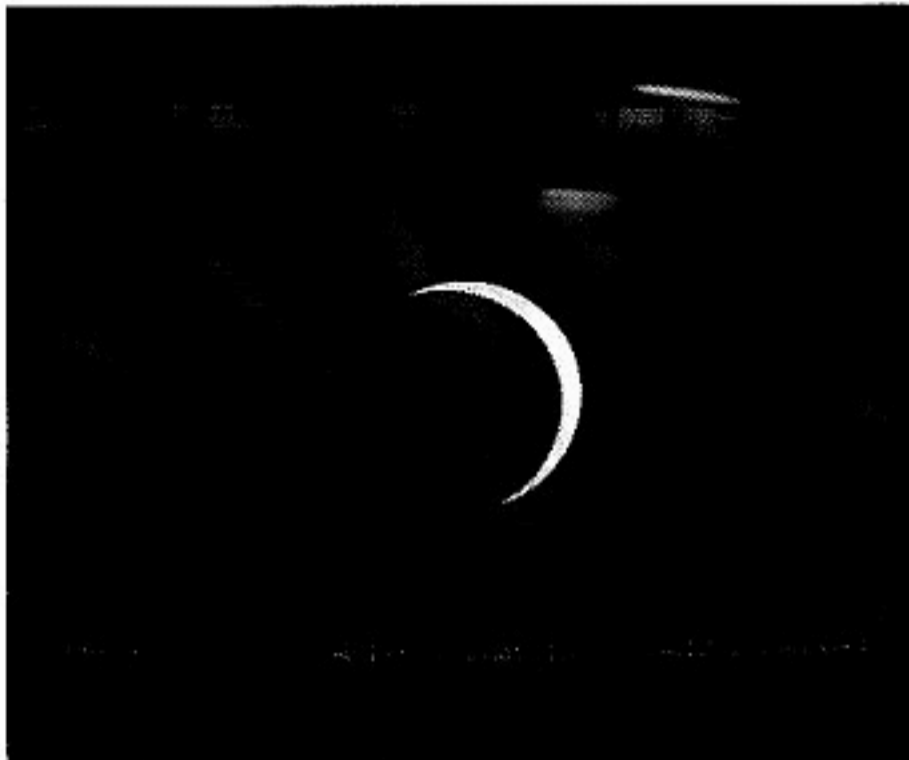
た可能性のある大きな日食とは次の二回です。

寛文六年六月朔日（一六六六年七月二日） 山本常朝、満七歳の時。

この時の日食は夕方に金環日食となり、下図でも分かる通り、金環日食を見ることが出来る金環日食帯は非常に狭い幅ですが、丁度佐賀市付近を通っています。また、中国の内陸部では皆既日食となつて見えていたはずで、佐賀でも限りなく皆既日食に近い金環日食であり、もし曇天であつても数分間、空が真っ暗闇になる現象が、あつたはずです。ただ山本常朝七歳の時、記憶にあつたかどうかは知る由もありません。

【朔日】

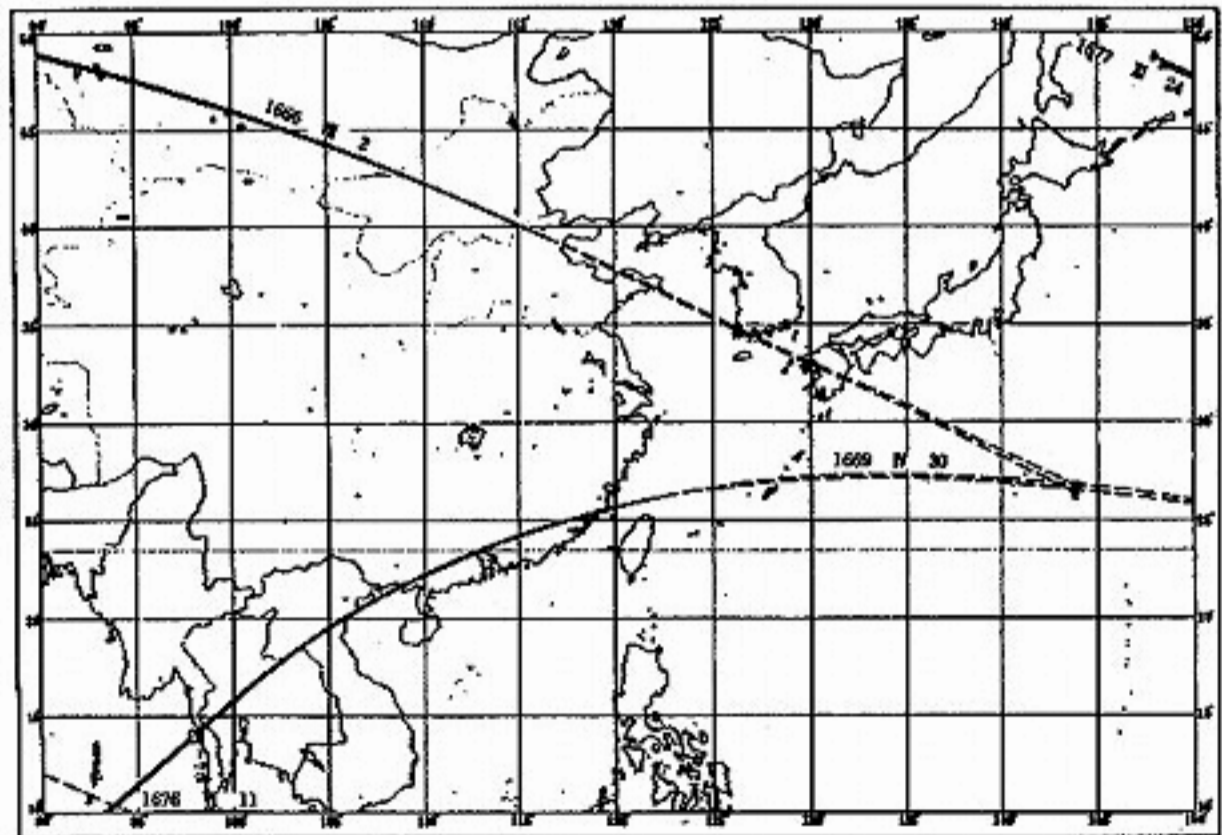
この時代は月の満ち欠けを基本とする太陰太陽暦の貞享歴を採



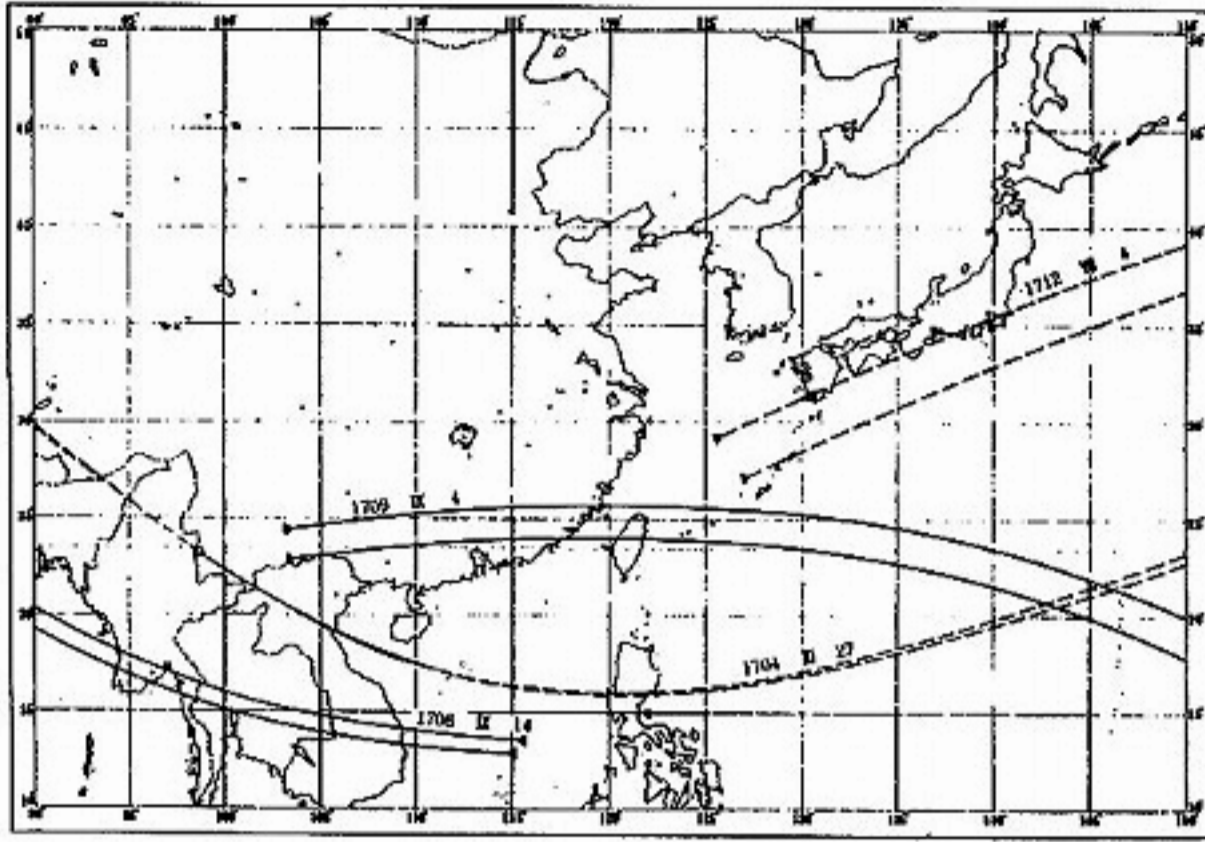
② コンピュータシュミレーションその1
パソコンでこの日食を再現したもの。午後6時18分頃食分が最大となっている。ソフトの誤差で部分食となっているが、実際は金環食のはず。



④ 沖縄金環食連続写真
1987年9月23日、佐賀天文協会 副島 勉さん撮影



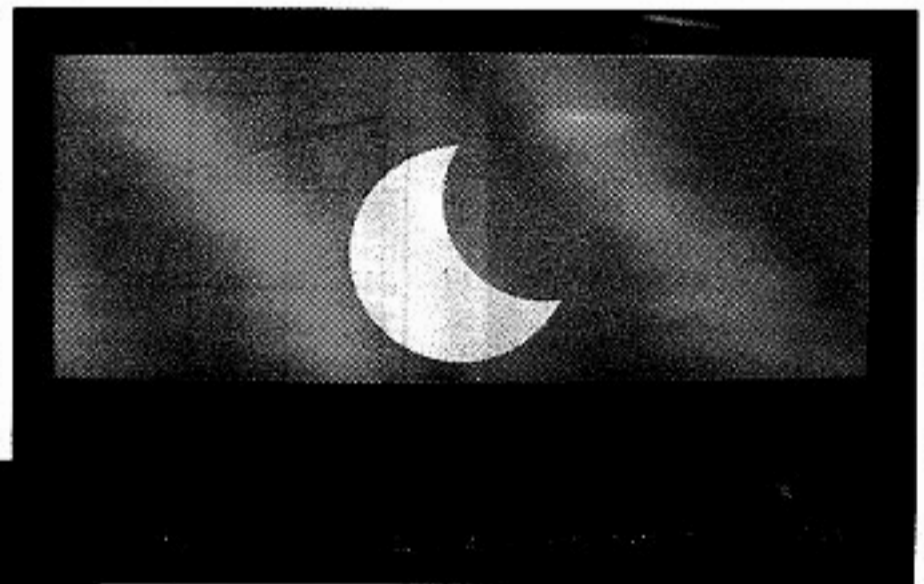
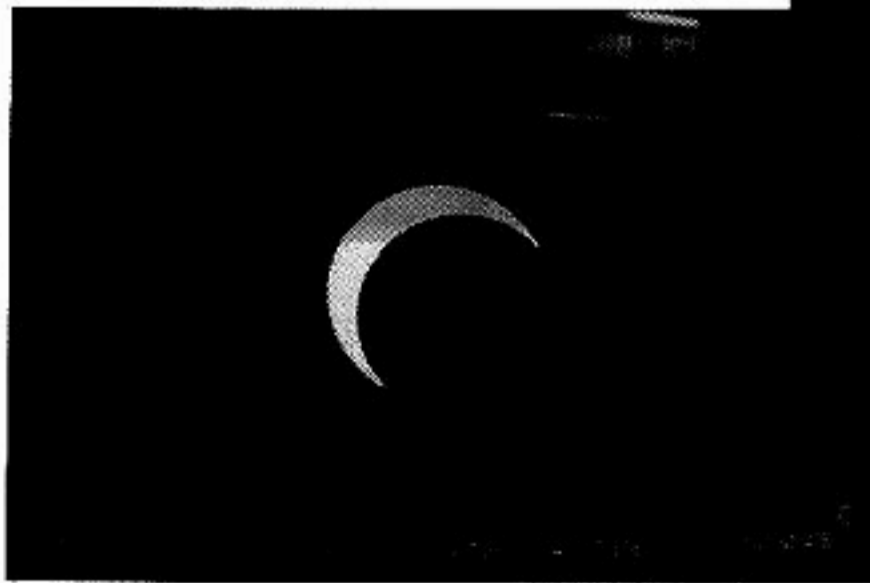
③ 中心日食帯図その1
寛文6年6月朔日（1666年7月2日）の中心日食帯図
【日本・朝鮮・中国 日食月食宝典】より



⑤ 中心日食帯図その2
 正徳2年6月朔日（1712年7月4日）の中心日食帯図
 『日本・朝鮮・中国 日食月食宝典』より

用していた。朔日とは毎月の始めの日、つまり月が新月の時を毎月一日としていた。当然、日食は朔日にしか起こらない。
 正徳二年六朔日（一七二二年七月四日）常朝、満五十三歳の時。
 この時の日食は左図の様に太平洋沿岸で金環日食でした。佐賀では日の出の時に太陽はすでに半分近く欠けた状態で昇って来た

① コンピュータシュミレーションその3
 午前5時50分頃、食分が最大（0.9前後）
 になった様子



② コンピュータシュミレーションその2
 午前5時20分頃、地平線から出たばかりの時
 で、半分近く欠けている。

と思われ、地平線に近いため眩しさも無く食分〇・九前後の深い部分日食として見えたはずです。

七、「日月重出」の読み方とその意味

まず、「日月重出」の読み方は、栗原荒野氏の「校註葉隠」では「じつげつじゅうしゅつ」と振り仮名をつけてあります。

「葉隠」で云うところの怪事を日食と解釈すると、「日月重」だけでも充分意味が理解できます。では最後の「出」は何を意味するのでしょうか。私はこの「出」を「日の出」と解釈したいと思います。理由は前段で解説した正徳二年の日食は太陽が欠けたままの状態で日の出となっているからです。もし逆に太陽が欠けたまま沈んだとしたら「日月重没」と表現されていたはずですが、そこでその読み方ですが私は「ひ、つき、かさなりていでくること」としたいと思います。

ところで「葉隠」は山本常朝の口述を田代陣基が筆記したと伝えられています。殆ど日付けが記入されていません。しかしながらこの日食を基準に推理すると、少なくともこの段の口述は田代陣基が初めて山本常朝の草庵を訪ねた宝永七年（一七一〇年）の二年後、正徳二年（一七一二）六月以降に行われたはずで

八、「彗星」について

彗星は注釈の通り、彗星で問題ないと思います。ただ、望遠鏡などが、普及していなかった江戸時代に、一般庶民が大騒ぎする

位の彗星となると余程大きな彗星でないと印象が薄いと思います。そこでまず思いつくのが例のハレー彗星ですが、山本常朝の生存期間中（一六五九〜一七一九年）、ハレー彗星は天和二年（一六八二年）に出現しています。この時のハレー彗星は地球から離れた所を通過したため、尾の長さ十度ないし十五度で、ハレー彗星としては特別に大きく見えたわけではなかったようです。

前述のハレー彗星でも何とか「怪事」と呼べる程の彗星でしたが、記録を調べて見ると、このハレー彗星出現の二年前に超横綱級の大彗星が出現しています。その彗星とは「キルヒの大彗星」のことで、ドイツの天文学者キルヒによって一六八〇年（延宝八年）十一月十四日早朝、東の空で発見されたものです。一旦、十度位の尾を引いて太陽に接近して見えなくなりましたが、再び十二月二十日過ぎには長大な尾をたなびかせて西の空に現れました。その時の尾の長さは七十度ないし九十度に達した程の大彗星で、その後、約二ヶ月の間、肉眼で観測されたそうです。これだけの彗星となると世界中にその観測記録が残っており、勿論、日本にも「武江年表」を始めとして多数の詳しい記録が残っているようです。

他に、人目を引いた可能性のある彗星としては、元禄二年（一六八九年）尾長六十度に達して二週間見えていたといわれる彗星。それに元禄十二年（一七〇二年）尾長三十度ないし四十度に達して約十日間見えていたといわれる一七〇二年第一彗星の二つ位と

以上、山本常朝の見た可能性のある彗星を四つピックアップしましたが、彗星の尾長の模様、記録数の量、更に肉眼で見えていた期間などを考慮するとやはり、「キルヒの大彗星」がずば抜けて大きく、明るかった彗星であった事が推察されます。ちなみに、この時の山本常朝の年齢は満二十一歳、山本常朝が師として尊敬していた湛然和尚が亡くなっています。また、この年佐賀藩は大飢饉に見舞われていて、人々はこの「キルヒの大彗星」を凶星として畏れ、おののきながら眺めていた様子が想像できます。それだけに山本常朝にとっては「キルヒの大彗星」の印象が一番強かったのではないのでしょうか。

【箒星】

彗星の事であるが、「箒」の意味は「竹ぼうき」。彗星の尾が竹ぼうきに似ていることから思われる。読み方は「ぼうきぼし」または「はわきぼし」と読む。

【彗星の大きさと角度】

ここでいう彗星の大きさとはい地球から見た見かけの大きさで角度で表す。彗星の長さが地平線から頭上までであれば九十度。腕を前方に伸ばして親指と人差し指を広げた角度が約十五度。

九、「光物」について

「光物」の解釈について、稲妻や落雷の事を「光物」と表現した記録もあるようですが、ここでは素直に注釈通りに、流星で正解と思います。ただし、人々の噂になる程の流星となると闇夜を

昼間のように明るく照らす大火球（流星のうち特に明るい物）や、大音響を伴って落下してくる隕石が想像できます。他に考えられるとすれば、花火の様に流星が何万個も乱れ飛ぶ大流星雨などが考えられます。ちなみに、大流星雨として有名な「しし座流星群」が一六九八年に日本で見られたとの記録が残っています。なお、ノストラダムスのいう一九九九年の十一月に、その大出現が予想されています。

この「光物」をUFO研究者が解釈すると、「山本常朝はUFOを目撃していた！」となる訳ですが、UFO説は少々奇抜すぎるので大火球説または大流星雨説を私の解釈としておきます。



⑧ 「光物」

「天の川を横切る光物」

広島天文協会 仲間泰宏さん撮影

十、山本常朝 七夕を詠む

前節で葉隠の解説は一応終わりますが、蛇足ながら、山本常朝が宝永八年（一七一一年）に七夕と題して和歌を詠んでいます。ここに紹介したいと思います。山本常朝は和歌の道でも達人の域に達していたそうで、藩主鍋島光茂公の命を受けて和歌に関する仕事のために京都の公家のもとへ何回も上京したとのこと。この辺のいきさつは古賀秀男先生が詳しいので省略します。

七夕

そのかみのまことをあふけ誓ひてし契りかわらぬ星合の空

・そのかみ——上代、つまり大昔の事。ここでは七夕の事を詠っている。中国古代表から伝えられてきた七夕伝説のこと。

・まこと——牽牛、織女の変わらぬ愛情を「誠」と表現した？

・あふけ——「仰げ」と読む

読んでいる方が、赤面する程ロマンチックな和歌ではないでしょうか。とても「武士道といふは死ぬ事と見つけたり。」との名言を吐いた山本常朝の和歌とは思えないところ。蛇足ついでで、七夕について少々解説します。七夕伝説の内容については皆さん御存知だと思いますので省略します。前ページの「光物」の写真で縦に流れている白い帯が天の川。流星の右端の輝星が牽牛星、天の川を挟んで右側やや上の輝星が織女星です。

牽牛星・織女星の間には天の川が流れていて、普段の日は渡れま

せんが七夕の日だけは、鵲（かささぎ・カチガラスのこと）が集まって橋を作って二人はその橋を渡り、年に一度の逢瀬を楽しんだと云われています。中国ではこの橋の事を鵲橋（じやつきょう）と言います。鵲はなかなか会えない人に引き合わせてくれる縁起のよい鳥とされています。もともと天文仲間では最近の七夕さんは新暦の七月七日、月遅れの八月七日、更に旧暦の七月七日と、年三回のデートを楽しんでいるとの専ら噂です。当時でも、日本では佐賀地方だけにしかいなかった鵲を見ながら山本常朝はこの和歌を詠んだのでしょうか。

今年の春には西村佐賀市長の英断で佐賀市立の本格的天文台が西与賀小学校の旧跡地に設置される事になりました。この天文台の入り口に山本常朝の歌碑でも建てたらいかがでしょうか。きつと全国から物好きの恋人達が集まって来て「葉隠」も更に有名になったりして？ついでに天文台の愛称を「鵲橋天文台」にしては。

十一、江戸時代の日食予報

閑話休題。本文で述べるべきであったと思いますが、当時の日食予報ほどの程度であったかと疑問に思われている方も多々あります。日食・月食予報は精度を別にすればすでに中国から輸入した暦をもとにして奈良・平安時代から行なわれていました。この間、数度の改暦が行われていますが、その理由の一つは日食・月食予報の精度を上げるためでした。貞享二年（一六八五年）それまで精度が悪かった宣名暦せんめいれきに替って幕府天文方の天才、渋川春

海によって考案された貞享曆じやうかうれきに改曆されて以来、当時としてはかなりの予報精度に達したといえます。もともと予報といっても江戸中心の予報で、予報が外れた事もあったようです。貞享曆は頒曆はんれきとして全国に配布されたので当然、佐賀藩でも正徳二年六月の日食は一般庶民はいざ知らず、字が読めた人には日食が起こる事は周知の事実であったと思われる。

十二、まとめ

以上、「葉隠」の天文に関する数文字から色々推論をこねくり回しましたが、本文中でも述べたように古文書記述の裏付けを取っていない所が多々あります。例えば、寛文六年の日食と正徳二年は共に旧曆の六月で新曆に直すとそれぞれ、七月二日、七月四日で梅雨の最中となります。実際に日食が見えていたかどうか大いに疑問とするところです。誰か当時の記録に詳しい人は御教授願いたいと思います。ついでに「キルヒの大彗星」についての記録は多久邑の古文書に残っているとの話を聞いたことがあります。筆者は現物をまだ見ておりませんので、そのうち調べたいと思います。

また、葉隠研究についてですが、私の思っていることが、岩波新書に『囲碁の世界』中山典之著という面白い本に書いてありますので、その一部を紹介したいと思います。

「平安時代になると、『源氏物語』の紫式部、『枕草子』の清少納言が、かなりの打ち手であったろうと思われる。両才媛の囲

碁の記述は囲碁の専門用語を使いこなし、情景描写も碁を知っていなければ書けぬくだりがあってまことに面白い。余分な話になるが、有名な国文学者でも碁の用語が分からぬために『源氏物語』の解釈が間違っているケースも少なくないということである。」と述べてあり、世界的に有名な『源氏物語』でもこのような事をいわれる素人から指摘されています。同じ様なことが『葉隠』に言えるのではないのでしょうか。つまり葉隠研究にあたり、不明の箇所があれば、その道の専門家に勇気をもって尋ねた方が、正確で早く解決すると思います。今回この文章を書くにあたり、現代文訳を数点参考にしましたが、特に例の「日月重出」の解釈は全部同じでした。どうも同じ出版物からの孫引きではないかと思われる程です。解釈文を発表する場合、自分の専門外の用語の為に意味不明の点や解釈に教説ある場合は素直にその旨、注釈しておく事が、後から『葉隠』を学ぶ人への親切だと思います。特に、高名な学者が間違った解釈をなされると、その著書から孫引き引用になって間違いが定説になってしまうおそれがあります。

『葉隠』を読んでいる方には私の様には古文には弱いですが、趣味として得意分野を持っている方も多いと思います。例えば、城・武術・刀・神社仏閣等々、勇気を持って研究に踏み込んでみてはいかがでしょう。

最後に、この文章を書くにあたり、和歌の解釈を御教授いただきました古賀秀男先生、写真提供をして頂きました広島天文協会の仲岡泰宏さん、パソコンを操作して頂きました佐賀天文協会の

副島勉さんに感謝申し上げます。また参考文献としては後述しますが、特に渡辺敏夫氏の著書は非常に参考になることが大であり、勉強させて頂きました。

【参考・引用文献】（本文中で紹介した葉隠関係の本は省略）

近日本天文学史 上・下 渡辺敏夫 恒星社厚生閣

日本・朝鮮・中国 日食月食宝典 渡辺敏夫 雄山閣

星の古記録（岩波新書） 斎藤国治 岩波書店

古天文学 斎藤国治 恒星社厚生閣

古天文学（季刊誌・星の手帖） 斎藤国治 星の手帖社

こよみと天文・今昔 内田正男 丸善

時と暦 青木信仰 東京大学出版会

諸葛孔明と卑弥呼 田中重弘 光風社出版

ハレー彗星物語 長谷川一郎 恒星社厚生閣

ハレー彗星 草下英明 平凡社

スカイウォッチング事典 朝日新聞社

山本常朝の和歌について 古賀秀男 佐賀女子短大研究紀要

【参考コンピュータソフト】

超高速天文シュミレーション 田中憲男 アスキー

【使用パーソナルコンピュータ】

日本電気 PC9801VM21

【筆者紹介】

昭和二十九年生れ。佐賀西高校、日本大学農獣医学部食品工学科卒業後、父親の経営する食品資材卸業、園田商事株式会社入社し、現在に到る。昭和五十五年より佐賀青年会議所に所属。

「天体観望」を趣味としており、現在佐賀天文協会副会長。



⑨ 「筆者近影」

牛津町空山にて、筆者の天文機材と共に。日の出頃の撮影ですが、正徳2年6月朔日にはこの事点で太陽は欠けていました。

